

## 敦煌文献中の地論宗諸文献の研究

石井公成

今世紀初頭に発見された敦煌文献は、中国仏教の見直しをせまる文献を数多く含んでいた。中でも、三階教文献が大量に発見されてその実態が明らかになったこと、また一連の禅文献の出現によって従来の禅宗史が大幅に書き改められてしまったことはよく知られている。だが、三論宗・天台宗・華嚴宗などの研究者は、敦煌文献中には吉藏・慧思・智顛・智儼・法藏といった祖師たちの著作がほとんどないこともあって、敦煌文献にはさほど興味を示さなかった。敦煌文献を使うにしても、大正大蔵経の八十五巻に収められているものを参照する程度にとどまることが多かったのである。しかし、最近、敦煌写本のうちに地論宗の註釈や綱要書などが少なからず含まれていることが明らかになったうえ、そうした文献中に見える教理が三論宗・天台宗・華嚴宗などの教理にかなりの影響を及ぼしていることが次々に指摘され始めたため、状況は大きく変わりつつある。

敦煌文献中の地論宗文献に注目したのは、昭和の初年に大英博物館でスタイン文書を調査・整理し、そのルートグラフを大正大蔵経

に提供された矢吹慶輝博士が最初であろう。矢吹博士は、ペリオ文書や日本将来文献についても調査し、大正大蔵経八十五巻に収録された文献、すなわち『十地経』や『十地経論』を引用する『華嚴略疏』の残巻(S二六九四)、法上『十地義疏』の残巻(P二一〇四)などを中心にして簡単な解題を発表された(のちに『鳴沙余韻解説篇』一九三三年、に収録)。その際、博士は、『華嚴経』の写本には北魏や隋の年号を記した跋を有するものが少なくないことに注目し、「或時代の燉煌仏教は頗る華嚴と深縁ありしを想見せしむるに足る」(前掲書、五頁)と述べ、また敦煌写本には『十地経』や『十地経論』の註疏の残巻が少なくないことを指摘されている(同、一〇頁)。これは敦煌のみならず、北地の仏教全般の性格を考えるうえで重要な指摘であったが、以後あまり注意されていないようである。『華嚴経』の写経が盛んであったのは、具体的には追善その他の様々な理由に基づくのであろうが、そうした流行が『十地経論』研究の高まりとまったく無関係であったとは考えにくい。

ところが、その『十地経論』を教学の柱とする地論宗文献に対する研究はあまり進んでいない。敦煌から持ち出された写本について

は、各所蔵機関が長年にわたって目録作成に努めたほか、多数の研究者が断簡の同定を試みてきたのだが、地論宗の文献を取り上げた研究は、禅宗文献に対する研究に比べれば誠に僅かな数しかないのである。これは、先の法上の『十地義記』などをのぞけば、地論宗の学匠の名を記した敦煌文献、それもまとまった量の文献がほとんどなかったためであるが、地論宗の教学自体、研究が盛んでなかったことも大きい。敦煌文献出現以前の段階では、地論宗文献のうち完本で現存するのは『大乘義章』『起信論義記』など浄影寺慧遠の著作のみであり、またある程度まとまった形で現存するのも、七巻のうち最初の四巻が存する『十地論義記』や上巻だけが存する『勝鬘経義記』など慧遠の著作に限られており、慧光、法上、靈裕などについては断簡や逸文しかないという状況であった。このように、地論教学の内容や歴史が明らかになっていないのであるから、敦煌写本中に『十地経論』を盛んに引用している断簡があっても、地論宗のこれこれの系統に属する、これこれの時期の文献と位置づけるのが困難であったことは言うまでもない。たとえば、妻木直良氏は、一九二五年に発表した論文において、地論宗文献である『仁王般若実相論』を、鳩摩羅什時代の旧三論系に属すると判定された<sup>3</sup>。また、S二六九四と北八〇（辰五十三）は、地論宗初期の『華嚴経』注釈であるにもかかわらず、S二六九四は巻首に「華嚴略疏卷第二」とあり、北八〇（辰五十三）は巻尾に「華嚴略疏卷第一」とあるため、『敦煌遺書総目索引』（一九六二年）では、同名の疏を著したとされる智儼（六〇二—一八六七）の伝記等に従い、この二写本は智儼の『搜玄記』であると注している（四六〇頁）。<sup>4</sup> こうした誤りがなされるのも、地論教学研究の遅れによるものである。

そうした状況の中で、敦煌写本中の地論宗文献の研究に本格的に取り組んだのは、藤枝晃博士を中心とする京都大学人文科学研究所の敦煌研究班であった。同研究班は、『勝鬘経』を軸として北朝の写本を精査する過程で、外形面と内容面における様々な特色や年代による変化の過程を明らかにし、敦煌文献研究の水準を大幅に上げたことで知られるが、その研究に拍車をかけたのが、聖徳太子の撰とされる『勝鬘義疏』が引く「本義」なる書ときわめて似た内容を持つ北京コレクション中の写本、奈九三と玉二四の発見であった。藤枝博士が敦煌本の『勝鬘経』写本の様相を解明した「北朝における『勝鬘経』の伝承」（『東方学報』第四十冊、一九六九年三月）において、これらの二写本を『勝鬘義疏本義』と名づけ、また日本思想大系『聖徳太子集』（一九七五年）において『勝鬘義疏』中国撰述説を提示したため、その是非をめぐって激しい論争が生じたことは記憶に新しい。この論争の過程で明らかになったのは、經典の注釈というものはどれほど先行文献に依拠して書かれるかという点であった。すなわち、一つないし複数の先行文献からそのまま抜き書きし、あるいは要約し、文字を少し変え、不要と思われる部分を削り、「一云」ないし「有人」の説としてその解釈を紹介し、時に否定し、自らの解釈を盛り込む、といった作業を重ねてゆくことによって、この時期の注釈は作られていったのである。

その敦煌研究班の中で、すぐれた研究を次々発表していったのが、それも地論宗文献に着目した研究を発表していったのが、『勝鬘義疏本義』を発見して校訂本文を公刊した古泉円順氏であった（『敦煌本『勝鬘義疏本義』』、『聖徳太子研究』第五号、一九七〇年八月）。古泉

氏は、「敦煌出土仏典注釈書の『円宗』」（IBU四天王寺国際仏教大  
学文学部紀要」第十五号、一九八三年二月）において、同じ学派の  
作と見られる『勝鬘經』の注釈、S六二三八と、『華嚴大義章略述』  
と仮称される綱要書、S六一三Vを検討し、これらは天台文献が地  
論師の説として言及しているものと同様の立場に立つ地論宗文献で  
あり、天台教学に先行する「前天台」的な教理が存在していた可能  
性を示唆された。また、『自分行』『他分行』（『日本仏教学会年報』  
第五十一号、一九八六年三月）では、六世紀初の書写と推測される  
『華嚴經略疏』（S二六九四）など初期の地論宗文献を精査し、初期  
地論宗では「自分行」「他分行」の語を用い、慧遠の頃からは「自分  
「勝進」という対比が用いられることを明らかにし、地論宗文献の  
年代判定への道を開いた。このほか、保定五年（五六五）の紀年を  
持つ『十地義疏』（P二二〇四）と同年代と推測される『勝鬘經』の  
注釈（S二四三〇）を中心にして『勝鬘經』注釈の諸写本を検討し、  
S二四三〇はS五二四から慧遠『勝鬘義記』に移る過程での中継点  
の役割をになっていることを明らかにする（S二四三〇敦煌本『勝  
鬘經注釈書』断簡）、『奥田慈心先生喜寿記念 仏教思想論集』、一九  
七六年）など、その貢献は大きい。

この時期に、吉蔵に及ぼした慧遠の影響という点に的をしばり、  
慧遠『勝鬘義記』下巻の一部に相当するP二〇九一とP三三〇八を  
調査して『勝鬘宝窟』への影響を示した鶴見良道氏であった。氏に  
は、「勝鬘宝窟の染浄依持説——浄影寺慧遠『勝鬘義記』と比較しつ  
つ——」（駒澤大学仏教学部論集」第六号、一九七五年十月）、「勝鬘  
經の『六識及心法智』解釈——『勝鬘宝窟』を中心として——」（印

敦煌文献中の地論宗諸文献の研究（石井）

仏研」第二十四巻第一号、一九七五年二月）、「ペリオ三三〇八慧遠撰  
『勝鬘義記』残巻及び逸文の研究——『勝鬘宝窟』研究の視点より  
——」（『聖徳太子研究』第十一号、一九七七年十二月）などの一連の  
研究がある。

なお、敦煌写本の調査によって、北地の『涅槃經』研究において  
は、慧遠『大般涅槃經義記』の講義が盛んであったことを明らかに  
したものとして、梶信隆「中国における『涅槃』の流伝——敦煌写本  
を中心として——」（『竜谷大学大学院研究紀要 人文科学』第十二  
集、一九九一年三月）がある。

はやくから敦煌文献にたいする広範な研究を進め、精力的に論文  
を発表してこられた平井宥慶氏は、その関心の一つとして、鳩摩羅  
什・僧肇・道生などの注釈と天台・吉蔵などの注釈とをつなぐ時代  
の注釈を敦煌文献中に見出すことによって注釈の変遷の過程を明ら  
かにしようとしてされており、そうした試みの中で地論宗教学の影響が  
見られる注釈にも着目された。「敦煌本・南北朝期維摩經疏と注維摩  
」（『大正大学総合仏教研究所年報』第四号、一九八二年三月）はそう  
した試みの一つであり、十地をめぐる議論を展開する西魏頃の維摩  
經疏の断簡（北二六・二四・二三）に言及された。五世紀の写本で  
ある『維摩經義記』（P二二七三、北辰三二、S二七三三）について  
も調査されたが、現在は敦煌写本研究会による共同研究の形で、「大  
正大学総合仏教研究会年報」誌上において、継続して同書の注釈が  
発表されている。

なお、氏は、「教義内容乃至教理用語の説明・解説を記した文献」  
が「敦煌文献存在年代のほぼ全時代域にわたって、各時代に異なる

内容傾向の特徴を有しつつ存し、その傾向の変遷過程は、敦煌地域（敦煌をはじめとして、敦煌文献に影響を及ぼしたであろうところの仏教文化圏を含む）における仏教教理修学上の学習傾向の変化を示すものとみることができ、その内容的特徴は、その時代における教学理解度の深淺（乃至はその背景となる当時代の仏教学の傾向全般）を如実に物語るものである」とし、「それは仏教が中国人に受容されていく過程であり、また変容していくあり様でもある」（『敦煌本・仏教綱要書の研究（一）』、「大正大学総合仏教研究所年報」創刊号、一九七九年五月）という、きわめて重要な問題提起をされ、そうした立場から一連の綱要書について研究を発表されている。その際は、当然ながら、現存する代表的な綱要書である慧遠『大乘義章』との比較を行っていくことになるが、西魏の大統十六年（五五〇）に書写された『大義章』（S六四九二）の研究などは貴重な仕事である（『敦煌本仏教綱要書類考』、「宗教研究」第五二巻第三号、一九七九年二月）。「敦煌本・仏教綱要書の変遷」、「大正大学総合仏教研究所年報」第二号、一九八〇年三月）。

なお、敦煌文献中の綱要書のうち、『撰大乘論』に基づいて唯識思想の重要な項目について略述したものについては、つとに宇井伯壽博士が詳細な研究を発表されており（『西域佛典の研究』、岩波書店一九六九年）、勝又俊教『敦煌出土の撰大乘論章について』（『印仏研』第一巻第二号、一九五三年）もある。ここで、綱要書を支えた論書について述べれば、おそらく『成実論』↓『十地経論』↓『撰大乘論』と移り、そして新訳経論にとって変えられるのであろうが、新訳経論については、敦煌では『大乘百法明門論』などが中心となったように思われる。

鶴見氏や平井氏と同様、慧遠が吉蔵に大きな影響を与えたことを実証したものに、『法華経』の注釈であるS四一三六は慧遠撰『法花経義疏』と呼ばれるべきものであつて、吉蔵『法華義疏』ときわめて近似していることを指摘した、古泉円順『慧遠『法花経義疏』写本』（IBU四天王寺国際仏教大学紀要」文学部第十九号・短期大学部第二十七号、一九八七年）があるが、これらの諸氏とは別個に地論教学が天台智顛に与えた影響を精力的に追及していたのが、青木隆氏である。青木氏は、『維摩経文疏』における智顛の四土説について（『早稲田大学大学院』『文学研究科紀要』別冊十一集（哲学・史学編）』、一九八五年一月）、「中国地論宗における縁集説の展開」（『フイロソフィア』第七十五号、一九八八年三月）において、智顛が用いている有為縁集・無為縁集・自体縁集・法界縁集という四種縁集説は、地論宗南道派の伝統説であり、初めは二種ないし三種であつたものが智顛の時代に四種に増加したらしいとしてその展開を論じた。これは、地論宗文献の年代を判定するうえで、きわめて有効な発見であつた。また、青木氏は、智顛に影響を与えたのは、法上から慧遠へと続く系統ではなく、道憑から靈裕へと至る系統の縁集説ではないかと推測されたが、これは地論宗における異なつた系統の存在を明らかにした重要な指摘であつた。氏は続く「天台行位説の形成に関する考察——地論宗説と比較して——」（三崎良周編『日本・中国 仏教思想とその展開』、一九九二年）において、智顛は、『法鏡論』に見えているような地論宗の説を批判的に摂取することによつて自らの体系を形成していったと論じた。

これらの業績を参照しつつ地論宗の教学を調査していた石井は、

仏陀三蔵撰と称する『華嚴経両卷冒牒』（金沢文庫蔵）が地論宗南道派の後期の作であること、それも大乘の諸経は平等であることを強調する慧遠とは異なり、『華嚴経』を至上のものとする教判を主張する文献であることを明らかにした。また、新羅の義湘（義相）の『一乘法界図』を研究する過程で、敦煌文献中に「法界図」（P二八三二B、S二七三四）ないし「三界図」（S三四四一）と称される綱要書的な文献があり、これらは縁集説を説く地論宗文献であって六一三Vと同じく『大集経』を尊重する文献であること、そして「三界図」の説く行位説と智顛『四教義』が地論師の説として引くものがきわめて類似していることなどを指摘した（敦煌出土の地論宗諸文献、「印仏研」第四十二卷第二号、一九九四年三月。「新羅華嚴教學の基礎的研究——義相『一乘法界図』の成立事情」、青丘学術論集」第4集、一九九四年三月）。また、『大集経』は北地では無障無礙を説く経として受けとめられていたことを指摘し、『大乘五門十地実相論』（北八三七七）、『大乘五門実相論』（北八三七八）などは『大集経』尊重派の地論師の作であることを説いた（『大集経』尊重派の地論師、「駒澤短大研究紀要」第二十三号、一九九五年三月）。

青木氏は、これを承けて、敦煌写本を調査し、縁集説を説く文献として綱要書（S四三〇三）と『融即相無相論』（北八四二〇）を発見し、「法界図」（P二八三二B）の翻刻を発表した（「敦煌本『法界図』の考察——地論宗教學解明のために——」、早稲田大学東洋哲学会第十二回大会資料、一九九五年六月。「東洋の思想と宗教」第十二号、ならびに天台学会編『天台大師の研究』に掲載予定。発表資料を送付して下さった青木氏に感謝する）。

最近のこうした方向の研究で重要なのは、これまで敦煌写本の目録類では「仏経疏釈」「仏経註解」「仏経論釈」などといった名称でくくられていた残巻のうちに、地論宗南道派の綱要書を見出し、天台その他への影響を指摘したことである。このことは、六朝から初唐にかけて、北地ではどのような教学が主流であったかを示唆するものと言ってよい。むろん、敦煌という地の特殊性を無視することはできないが、今後、敦煌出土の地論宗文献の調査を深め、三論宗・天台宗・華嚴宗などの関係を調査してゆけば、隋唐仏教の形成過程がかなり明らかになって来るものと思われる。

なお、写本断簡の同定には、膨大な知識とコツが必要であったが、これからはコンピュータが威力を発揮することになる。

(1) 主だった祖師の著作としては、法蔵『探玄記』卷十九（P二二一九）と、法蔵に帰される『花嚴経関脈義記』（P二二七九）あたりであろう。あと、「吉蔵法師撰」と明記され、吉蔵『法華義疏』の別本と推定されるS六七八九との関係について平井宥慶氏が論じている程度である。これは、敦煌における仏教の特色を考えるうえで重要であるばかりでなく、南地で生じた教学や北地の大都市やその周辺の地で発展した教学の広がりについて考えるうえでも見逃せない。

(2) 目録を中心とした研究史の概説としては、梅村担「敦煌探検・研究史」、榎一雄編『講座敦煌1 敦煌の自然と現状』、大東出版社、一九八〇年、参照。

(3) 妻木直良「敦煌本仁王般若実相論に就て」、「宗教研究」新第三卷二号、一九二五年、八二頁。同写本は、如来蔵思想に基づ

いて十地を論ずる風潮が盛んであった頃の地論宗南道派文献であることは、石井公成『大集経』尊重派の地論師」（駒澤短期大学研究紀要」第二十三号、一九九五年三月）。

(4) 実際、内容はかなり似ているのであるが、この二写本は、その後、筆跡から見ても六世紀初頭のもものと断定されるに至っており（古泉円順「自分行他分行」、日本仏教学会年報」第五十一号、一九八六年三月）、智儼の著とはなしえない。

(5) 石井「仏教学におけるコンピュータ利用」、「日本の仏教」第四集、一九九六年刊行予定。